



Title	第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生活〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	Kozhevnikova, Daria
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16485号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94945
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Daria_Kozhevnikova_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：コジェブニコワ ダリア

主査 教授 権 錫永
審査委員 副査 教授 川口 暁弘
副査 教授 青島 陽子

学位論文題名

第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生活

本論文は、第2次世界大戦後に出現した南サハリンという歴史空間に関する研究である。とりわけ、ソ連の統治・政策のもとで、その空間が形成されていく過程、およびそこに「混在」させられたソ連人、日本人、朝鮮人の生活と関係性に注目する。

第2次世界大戦後、日本領であった「樺太」は、ソ連に編入され、「南サハリン」となった。ソ連は戦争で行き場を失ったソ連人を南サハリンに移住させるとともに、労働力の確保のために囚人まで送り込んだ。深刻な状況にあった人材不足を解消するために、当局は約29万人の住民（日本人・朝鮮人）を残留させる方針をとった。本論文が対象とするのは、戦後3～4年に及ぶ日本人の残留期間中のソ連人、日本人、朝鮮人の「混在」生活である。

戦後の南サハリンの研究にはロシア側の史・資料と日本側の史・資料が必要だが、従来の研究は、そのうちのどちらかの史・資料に限定する傾向が著しかった。それに対して、本研究は日露両方の公文書類や回想録の徹底的な調査に基づき、両方の視点からアプローチすることに注力した。また、戦後の歴史空間としての南サハリンの特殊性を浮き彫りにするために、ソ連側の歴史認識の変化や「ソビエト化」という概念に代表される政策の特性、南サハリンへのソ連人移民の実態とその移住過程、などにも多くの紙幅を費やした。その内容は、戦後の南サハリンの形成過程の描出という意義にとどまらず、「混在」生活の多くの部分を決定づける背景としても重要な意味を有する。

本論文は、大戦後に南サハリンという歴史空間が形成されていく背景と過程、そしてその空間におけるソ連人、日本人、朝鮮人の相互関係と生活を論じたもので、まずその総合性が高く評価されるべきだろう。

従来の研究は、サハリンの地域・歴史全般、または日本人の引き揚げ問題に関心が集中しており、引き揚げに関する研究は当事者の回想録だけに依存する傾向が強かった。そのために、南サハリンに残留させられている間の日本人の生活全般を記述することは難しく、また記述できる部分に関しても、史料による裏付けを欠くという課題があった。その点において、日本語の史・資料はもちろんのこと、公文書をはじめとするロシア語の史・資料をもふんだんに使い、十分な裏付けのもとで、南サハリン在住のソ連人、日本人、朝鮮人の生活を広く記述した意義は大きい。朝鮮人に関しては、ソ連人や日本人との関係だけでなく、南サハリンに在住していた4つの朝鮮人グループについて、グループ間の相互認識や関係についても詳細に記述しており、朝鮮人ディアスポラ研究への貢献が認められる。

本論文は、大国によって変動の舞台にさせられた地域を研究対象とする境界地域史研究に分類できるが、戦後の南サハリンが形成されていく背景と過程、およびソビエト化政策と開発政策が行われる環境下の住民の生活の実態を描いたという意味で、ソ連史研究および強制移住の歴史に関する研究に貢献するところも大きい。

本論文には、ソ連の政策により「混在」を強いられたソ連人、日本人、朝鮮人が、不和を経験しながらも、和していく様子が克明に記述されている。筆者はそれが強いられた環境下で起こったこ

とであることを繰り返えし確認しつつ、そこに見いだされた住人間の和に意義を見いだそうとした。そうした意識は、南サハリンのような境界地域研究全般や植民地研究にも波及効果があるだろう。

ただ、朝鮮人に関する記述はインパクトが弱く、朝鮮人と日本人との関係がどうだったかについては、まだ研究の余地があることが指摘された。しかし、この課題は、さらなる研究の発展のために提示されたものであって、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

以上の審査の結果、本審査委員会では、全員一致して、申請者・コジェブニコワ・ダリア氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。